

「非認知能力の育成」を図る夏休みの過ごし方における教師の指導ポイント 第3弾

石田 俊司

今回が第3弾です。夏休み期間中に子どもたちに「非認知能力」を育成する仕掛けをどう作るかが、2学期の学習や学校生活に大きく影響していきます。夏休み期間中に教師が仕掛けるポイントをまとめてみました。



指導のポイントその3⇒「夏休み明けのフォローアップ」

(1) 学びの共有と相互理解の促進

- 夏休み中の経験を発表し合う時間を設け、クラス全体で学びを共有する。
- 他者の多様な経験に触れることで、共感性や他者理解を深める。
- 発表の場では、聞く側も質問や感想を述べることで、コミュニケーション能力を養う。

(2) 非認知能力と学習の関連付け

- 夏休みに培った非認知能力(例:粘り強さ、計画性)が、2学期以降の学習にどのように活かせるかを具体的に示します。
- 「夏休みの自由研究で粘り強く取り組めたから、算数の難しい問題にも挑戦できるようになったね」といった具体的な声かけをすることで、非認知能力が学習の基盤となることを認識させます。

(3) 個別支援の継続

- 夏休み中にあまり活動できなかった子どもや、困り感を抱えている子どもに対しては、個別に話を聞き、必要なサポートを継続します。
- それぞれのペースや特性に合わせた支援を行うことが重要です。

「夏休み期間中」における教師の関わり方のポイントとして

夏休み明けは、子どもたちの心のケアと学習への意欲を育む大切な時期です。特に非認知能力の育成に焦点を当てたフォローアップを心がけましょう。

まず、個別面談や声かけで夏休みの様子を聞き、子どもたちの不安や困りごとを丁寧に受け止めます。これは、自己肯定感や他者との関係構築力を育む土台となります。また、「心の天気」の共有は、自分の感情を認識し表現する自己認識力を養います。

学習面では、単なる知識の定着だけでなく、夏休み課題の丁寧なフィードバックや個別指導を通じて、粘り強さ(グリット)や問題解決能力を培う機会と捉えましょう。

生活面では、生活習慣の立て直しを促し、係活動や友達関係の再構築を支援することで、自己管理能力や協調性を高めます。これら非認知能力は、学習意欲や社会性の向上に直結します。子どもたちが安心して学校生活に戻れるよう、多角的な視点からきめ細やかなサポートをお願いします。